



Title	彙報
Author(s)	
Citation	懷徳. 1973, 43, p. 42-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90509
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

彙報

(懷德堂記念會)

○記念祭典 昭和四十七年十月七日(土)北濱三丁目本會(適塾内)に於て、午後一時半より記念祭典執行、新に上野精一、北澤敬二郎兩元理事長を奉祀、終つて大阪大學教授森東吾氏の「道德の社會的基礎」と題する記念講演があつた。

○秋季講座 昭和四十七年十月二十三日(月)より二十八日まで、本會及び大阪大學文學部主催、朝日新聞社後援で、大阪大學松下會館四階講堂に於て、毎日午後六時半より八時まで、第四十五回懷德堂秋季講座開催、聴講者延二百七十三人。

演題と講師

- | | | |
|---------------|--------------------|-------|
| 日明貿易と大阪府 | 京都女子大教授 | 小葉田淳氏 |
| 難波の宮と京 | 奈良國立文化研究所員 | 澤村仁氏 |
| 大阪城と大阪 | 前大阪城天守閣主任 | 岡本良一氏 |
| 平安朝の渡海僧 | 龍谷大教授 | 小野勝年氏 |
| 近世の大阪商人 | 關西學院大教授 | 宮本又次氏 |
| 商港寧波と寧波商人 | 阪大助教授 | 斯波義信氏 |
| ○昭和四十八年三月三十一日 | 事業運営委員森三樹三郎氏辭任 | |
| ○同 四月一日 | 阪大助教授日原利國氏事業運営委員就任 | |

○春季講座 昭和四十八年五月二十一日(月)より二十六日(土)まで、本會及び大阪大學文學部主催、朝日新聞社後援で、大阪大學松下會館四階講堂に於て、毎日午後六時半より八時まで、第四十六回懷德堂春季講座開催、聴講者延二百二十一人。

演題と講師

- | | | |
|---|----------------------------|---------|
| 新しい中國の文化と古典 | 追手門大教授 | 木村英一氏 |
| 呂氏春秋私見 | 羽衣學園短大教授 | 大久保莊太郎氏 |
| 西行と定家 | 甲南大教授 | 安田章生氏 |
| 新出富永仲基書翰 | 關大教授 | 水田紀久氏 |
| 焦楯の學問 | 同助教授 | 坂出祥仲氏 |
| 高階春帆について | 神戸女子大教授 | 北村學氏 |
| ○理事會 昭和四十八年八月七日(火) 玉江町ロイヤルホテルに於て午後一時より理事會開催。議案「舊懷德堂記録類、遺物類を、大阪大學へ寄贈の件」「基金募集の件」に付協議の結果、何れも原案通り決議し、午後二時半閉會。 | | |
| 出席者 | 堀田理事長、釜洞、上野、木村、田中各理事、岡野幹事。 | |

懷德堂記念扇子目錄

- (昭和四十一年以降)
- | | |
|----------|----------------|
| 昭和四十一年十月 | 狩野君山先生墨迹(石庭煮茶) |
| 同 四十二年十月 | 内藤湖南先生墨迹(彈舌授龍) |
| 同 四十三年十月 | 武内述齋先生墨迹 |

(横渠先生之言「爲天地立心、爲生民立道、爲去聖繼絕學、爲萬世開太平」)

同 四十四年十月 三宅石菴先生墨迹七絕

(三月三日天氣好、故郷他郷桃花新、花情不解人情異、笑向遠人如土人)

同 四十五年十月 五井蘭洲先生墨迹七絕

(錦江近西烟水綠、新雨山頭荔枝熟、萬里橋邊多酒家、游人愛向誰家宿)

同 四十六年十月 中井竹山先生墨迹(青出于藍而青于藍)

同 四十七年十月 朱文公墨迹

(讀聖賢書、立修齊志、存忠孝心、行仁義事)

同 四十八年十月 五井蘭洲先生墨迹(南山之壽)

(堂友會記事)

四十七年度雜誌「懷德」四十二號發行す。

四十七年十月五日 懷德堂記念會恒祭參列。

四十七年十月二十三日 土屋隆一氏より篤志の金五千圓也の寄贈を受く、厚意を深謝す。

四十七年十一月二十三日 會員佐々木準紹師逝去さる。師も多年に亘り聴講された、僧籍の篤學の士であつた。長逝を悼む。

四十七年十一月二十六日 近江シリーズ一回として、文學博士景山春樹先生の指導により、阪本日吉神社の見學を行う、當日稍天候不良なりしも參加者多數。

四十八年五月十一日 會員長澤薰治氏長逝、氏は懷德堂記念會重建開講以來引續き熱心に聴講された篤學の士であつた、哀惜の感に堪えず。

四十八年五月十一日 會員中島安之助氏より金壹萬圓也、會員岩淵賢治氏より令闔死亡による供養のため金壹萬圓也頂き厚志を謝すと同時に、兩氏を維持會員に推す。

四十八年六月十日 近江シリーズ二回として春季見學會を近江文化研究會主幹の宇野健一先生の指導で三上神社、大篠原神社、鏡神社、妙光寺山地藏磨崖像及び、鏡の寶篋印塔などを見學した。快晴清澄な空氣を吸つて、一日快よい見學であつた、參加者五十數名。

四十八年七月七、八日 近江シリーズ三回として、永源寺、及び湖東三山、苗村神社、石塔寺などの見學を宇野健一先生の御指導により行ひ、七日は永源寺瑞石會館に一泊、八日は永源寺方丈で管長の法話をきく、殊に苗村神社の國寶建造物は參加者一同大に眼福を得た模様であつた、參加者五十名。

四十八年八月二十日より二十五日まで、午後六時半より八時まで夏季講座の試みを昨年に引續き、茶隴山道場で開く、本會會長大阪大學名譽教授木村英一先生の特別出講により、論語の講習を受け、參加者延一〇〇名、來年も續講の豫定。

會 員 動 靜

死 亡

佐々木 準 紹 長 澤 薰 治

新會員

米谷 修	細川 誠二	熊谷 悦雄
越崎 清二	廣田 楠松	小松 悦子
池口 龍笑	池口 綾子	藤本 一太郎
中村 良夫	南出 泰助	中山 昭代
中島 燭子	木原 富藏	山崎 木染

御詫び 四十二號名簿中、誤字、誤植があつた様子ですがよろしく御赦し下さい。(酒井)

夏季見學旅行の記

ことしの夏季見學會は、臨地講義を主眼として、湖北の文化財を見直し、之に加えて、五山文學の繼承といわれる永源寺に一泊と決まり、七月七日・八日の兩日、行なわれることになった。

七月七日朝八時半、大阪驛西口には、貸切バスが用意されていた。懷德堂の紫の小旗がはためく。参加者四十八名。定められた座席に、會員の方々の元氣な顔が揃う。八時四十分出發。一路湖東へ。車は名神高速道路をすがやかに走る。中島委員より、この見學會を「なごやかに、有意義にと挨拶あり。つづいて、見學會の要項や、参考資料のプリントを配布して下さる。この日のために用意された詳細な印刷物を手にしつつ、一同胸はずむ。九時三十分大津にて小憩。車は八日市インターを出て、國道三〇七號線へと進む。

今回は講師として、近江文化研究所主幹、宇野健一先生をお

迎えることが出來た。石塔、寶塔には、特に造詣ふかく、且この地の御出身であることも加えて、まことにめぐまれた私達である。

湖東三山とは、西明寺、金剛輪寺、百濟寺の三名刹で、平安より鎌倉時代へかけての文化の中心といわれ、古い傳承と見事な林泉をもち、貴重な文化財をのこして來たとして知られている。

西明寺、山門下にて、バスを降りる。松楓のみどりあざやかな木立の中の參道をのぼる。途中、樹令二百年という天然記念物の不斷櫻（一名常磐櫻ともいう）のある苑をのぞく。いまはそのめづらしい花季でなかったのを惜しみつつ。參道のつきるところ二天門に到着。こけら葺きの八脚門である。兩側に、持國、增長の二天王が安置され、大きなわらじが奉納されていた。庭園を拜觀。山畔の上部に枯瀧、その前に、藥師如來を想わす立石。その左右には美しい石組みがあり、池には、折鶴、龜島があると、説明をきく。借景の庭園、觀賞式の美しい池に、水蓮の花が美事に咲いている。しおり戸のあたりに、八角石燈籠が配置されている。國寶の本堂を拜觀。飛驒の匠の造營と教えられる。佛像を拜がむ。多聞天、廣目天の美しさに見惚れ、こまいぬの木質の木目、材質の配慮など、お寺の方の説明をきく。本堂の藥師如來をはじめ、日光・月光の二菩薩。さては運慶作と伝えられる十二神將の木像に、毘沙門天の眼のかがやきに、感激する。全く美しい。宇野先生からは、内陣の説明に、葦股も三種あり、時代をみるものが出來、構造、裝飾とし

ての彫刻等、實物を指さして、くわしく教えて下さる。源平の繪圖がある。堂宇の南に建つ三重塔。この國寶の塔の美しさは、ひとしおである。四十五年、萬國博の古河パビリオンの塔は、この塔を模して作られたと説明をきく。特別に塔内をみせてもらう。陽があたると内部の畫面の繪具が、色を失うのでつねは閉してある由。巨勢金岡朝臣の一派の作と伝えられる壁畫は、いままなお色あざやかに保っている。寺内の奥の山林の中に、石柵に圍まれた石造り寶塔がある。美しい塔身に、刻銘もあざやかに残る石大工平景吉の銘。完全な形でのこった寶篋印塔である。塔身の中に、卷物を納めてある。基礎の上部には、開花蓮の彫が見え壇上式のものである。

ここをあとに金剛輪寺へ、行基菩薩の開山と伝えられる。鐵平石をしきつめた美しい參道。兩側には低く、さつきを植え、奥深い石たたみの道がつづく。もみじが程よく配置され、下馬と刻られた石のおもむきは格別である。芽吹きあざやかな楓と、高い松の木、その幹の大きさに年輪を数えられる。

長い石段道をあがる。木もれ日が丸く美しい。二天門ここでもわらじが架けられていた。一息やすむ、風が涼しい。門内すぐ正面に本堂、深山を想わす幽遠境である。

天平大悲閣という由。御本尊は、行基菩薩の御作。一刀三體彫り。こつこつと彫り進められたお作佛。生身の御本尊と伝えられている。ここの本堂にはくもが巢をかけません。無垢清淨の光があふれ、清淨觀のある本堂ですと寺側の説明である。本堂内陣を拜觀、床がきしむ。宇野先生からは、須彌壇に刻まれ

た年號、勾欄に剝られた蓮の花びら唐様式の文樣など、細部にわたって丁寧な教えていただく。

夏うぐひすが啼く。

書院、茶室水雲閣を拜見、桃山より江戸中期にかけて築庭された、池泉回遊式庭園の見事さに、心をうばわれる。桃山期の南庭、江戸期の北庭とそれぞれに趣がふかい。松のみどりと、もみじと、水蓮、庭内に、馬耳形の突起のある寶塔、寶珠、請花のととのつた石塔が數基散見される。三重塔、待龍塔は、再建豫定といわれ裏山に荒れていた。

淨財をあつめて是非建立したいとのこと、般若心經の寫經の用紙をいただいてかえる。心きよめて奉納したいと思う。

金剛輪寺をあとに、車は南へ。釋迦山百濟寺に向かう。聖德太子が、百濟からの歸化人のために、創建されたという勅願寺である。本院喜見院庭園をみる。この庭も亦同様に東の山々を借景とした、山水の趣深い、築山風の庭である。書院前にて記念撮影。近年豪華な花崗岩の巨石や、近くの谷川から、運び込まれた自然石で、立派に庭を造園されたと聞く。近郷の植木職、庭師が作庭したものですばらしく雄大でながめがよい。築山をめぐる、小高い山の上にあがる。堂宇の屋根を越して、湖東の平野が眺められ、はるかに、遠く近江の山々が見渡せる景色に満足する。山の風はすゞしい。この庭の各所に石塔や、寶塔、寶篋印塔がある。祈りをこめ納められた經文を、往時の人々を、ひととき偲ぶ。石と水の庭園のうつくしさを改めて見直したことであった。

夏の日暮れおそい。ここを出て今日の宿舎、永源寺の瑞石會館へとむかう。

愛知川のながれに沿って上流へ、音無川の溪流は、永源寺の森へつづく。山内裏の山の中程に建物が見える。バスを橋のたもとにのこして、つま先上りの道を會館にいそぐ。會館に到着。各々定められた室におちつく。入浴ののち一同、大廣間にて食事、「五觀の文」の書かれたお箸袋をみて、永源寺の宿坊と再確認して、いま食事を頂くことが出来る尊さ、有難さに、禪道の何かにふれたおみである。朱碗、朱膳の夕食であった。

勿論、お精進料理、見事な味付け、近江の國のお米もおいしい。名物のごま豆腐、こんにゃく、さては生麩の佃煮と、しみじみ味わう。食事半ばで、宇野先生よりお話を伺う。永源寺から、江勢街道にかけてのこと、政所のお茶。そして木地師たちのふる里君が畑、これらこの邊りの傳説ゆたかな祕境のはなし等、畫間の見學會の補習とも云えそうな講話に一同熱心に拜聴する。食後、各自部屋に引きとり、しずかに一夜をねむる。翌朝、今日も快晴。遠く鈴鹿の山々が望まれ、空氣が清澄である。朝食前を自由に散歩する。音無川に沿って、永源寺、愛知川ダムの方まで歩をはこぶ。朝の光に、川の水がきらめく、ひややかに、冷たいのだろう。道はいま舗装工事中である。土手に咲く草花、めずらしい百合の花、つゆを含む、山草の風情は、又一しお。

朝食を了え、瑞石會館をあとに、永源寺の本坊へ、裏參道より本堂へ、廣い境内、かえでが淡い影をおとし、朝の光の中に

鐘樓が美しい。夏、せみが鳴く、秋にはこの境内は、もえる様にもみじして美しいのだろう。

臨濟宗大本山、坐禪研修の道場である。湖東隨一の名刹にふさわしい、本堂に座って、永源寺管長、關雄峰親下の御法話をきく。「桑の葉の網となるのも虫のかげ」と因縁について話される人の世の諸行無常等おはなしはつづく。寺内の紫陽花が大きくうつくしい。

ここを出てバスのまつ橋のたもとへ、石たみの參道に夏の陽がふかい。享和二年再建という山門の太い木組みに楓の老木が、長い歴史を物語っているようだ。古いもの同志のつくり出す美は格別である。

參道の楓林、赤松の幹がうつくしい。表參道の石段を下りる。右山側の隨所に石佛が安置されている。十六羅漢である。つゆくさが可憐である。十六體の羅漢像、そのおのおの顔に、表情に、なつかしいものを感じる。

思いがけなく、こよなき人に、めぐりあえた氣がする。名物のこんにゃくと、精進しぐれをおみやげに購う。點心もちの店は閉っていた。これよりバスにて蒲生町石塔寺へ、石佛と石塔の寺である。門前よりまっすぐに、石段が高くつづいている。赤松におおわれた長い石段の斜面に、居並ぶ石塔、ここが、阿育王山石塔寺である。境内とところ狭しとやかむ石塔群、石佛の大集團である。

のぼりきると、山腹を切りひらいて中央に石の塔が、そびえ立つ。中國とも、韓國、百濟のものとも思われる異様に大きい

三重石塔である。何處か大陸的である。この阿育王寶塔は、飛鳥時代、日本最古の石塔といわれ、この大きな石をこの山の上まで、どうしてつみあげたのだらう。この塔をめぐる、八萬四千の石塔が整然とならぶ。つみあげ、かさねあげられた感じである。この大集團一瞬、静寂なものが、胸の中をながれ、心にしみわたる。ここでも寶塔の由來や、石塔、石佛について一經蓮、三經蓮、紅雀の文様など、實物について講師、宇野先生から説明をきく。この裏山一體に澤山の石佛、石塔がある。一めぐりする、墓地供養塔だらう。中には風化して、その形がこわれ、彫さえかすかに、判讀しがたいものもある。古い遠い時代からの遺物である。

ここより龍王町の苗村神社にと、延喜式の長寸神社である。龍王町綾戸に近づくころ、大きな森が見える。道ぞいに茅葺きの立派な樓門が、そびえたつ。バスをとめて、境内に入る。門の左に四角の石燈籠がある。竿に製作年號が記されている。

中央の社殿は西本殿、十禪師本殿、ともに流れ造り、八幡社本殿は室町時代に造營の由。ますぐみ、墓股は、洗練されたりつくしさがうかがえる。右側石燈籠は六角形、寶珠、笠も形がよく、火袋の一面に、散蓮花の文様が見える。中臺、地盤も、なかなかしつかりした見事なものである。樓門前の太鼓石橋をみて、その少し先の森にむかう、參道の四角石燈籠を見學する。東本社で、所謂延喜式の長寸神社とも云われているとの説をきく。

ここを最後として、歸路へ。大津パーキングエリアにて宇野

先生とお別れする。

今回は兩日にわたって克明に、御指導を頂くことが出来て感謝の外はない、大阪へ、歸りついたのは夕ぐれどき、天候にもめぐまれ、收獲の多かったことを喜びあいつつ解散、各々家路にいそぐ。

終りにいつもの事乍ら、酒井、中川、舟木、富岡の各委員長には立案、準備、交渉等、又當日はいろいろとお世話をお願いしたことなど併せ記して感謝のこころを捧げたいと思う。

(澤美枝記)